

『八境界註』（九州大学附属図書館 春日政治・和
男文庫蔵）、『抄物調査』（九州大学文学部国語
学・国文学研究室蔵）

古田，龍啓
九州大学大学院：博士後期課程

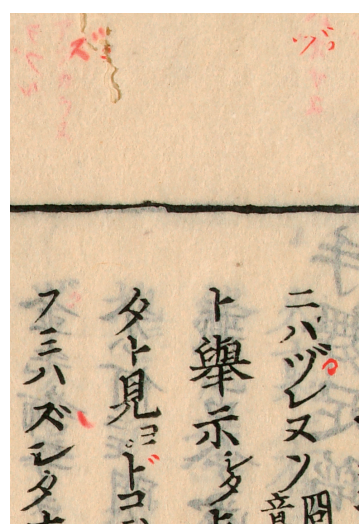
<https://doi.org/10.15017/6770315>

出版情報：文献探究. 60, pp. 1-, 2022-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

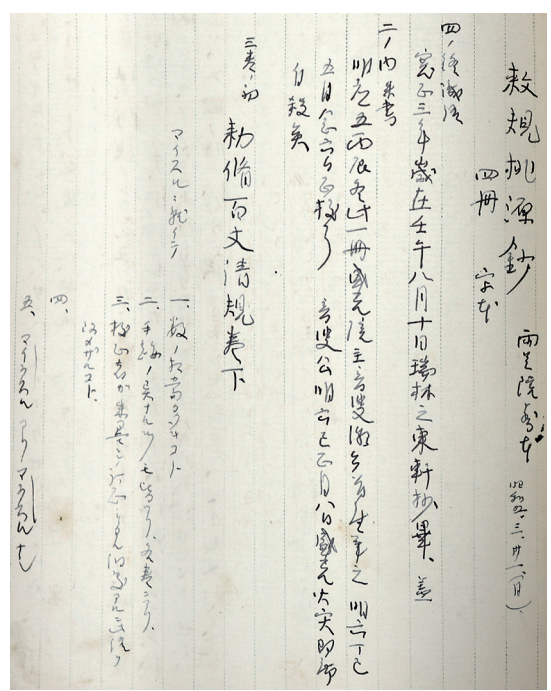


『八境界註』（九州大学附属図書館 春日政治・和男文庫蔵）、
『抄物調査』（九州大学文学部国語学・国文学研究室蔵）

上巻・二丁裏、二丁表



ヅとズの混同に対する注記
(上巻・十二丁裏)



『抄物調査』に記された両足院蔵
『勅規桃源鈔』の調査記録の一部

*『八境界註』の画像は図書館から提供されたもので、掲載に際し一部改変を加えた

解説

古田 龍 啓

春日家旧蔵の本書（上下巻・全二冊。七十二丁、縦二十七・一^{ナナ}、横十七・八^{ハチ}、袋綴）は、漢籍・仏典から集成した計一二八句を、八境界を構成する本分・現成・色相・截断・直指・為人・機関・関賊知賊の八項目に分類・配列し、各句に漢字片仮名交じりの注釈文を付した資料である（早苗一九九六）。明暦二年（一六五六）に、徳田八郎兵衛が板行したもので、注釈文は、「ツクバ山、富士山ハ、金輪水際ヨリライ出タ山ナレバ、動セヌゾ。ケレドモ、浮雲ガカカレバ、去来スルヤウナゾ」（上・二十六丁裏）のように、当時の口語を反映する講義調のゾ体を中心とする。「マツスグナコトダゾ」（上・三丁表）といった東国方言の指標とされるコピュラのダも交じることから、柳田（一九九三）が指摘するように、関東地方を中心に、曹洞宗の僧侶によって作製された洞門（とうもん）抄物の一つとみられる。

本書の表紙右下に、春日政治（一八七八―一九六二）の屋号「杉の家」の「杉」の字が朱墨で記され、巻首に氏の蔵書印「雲出鳥還処所蔵」があることから、政治の手沢本であったことが分かる。口絵の画像から明らかなように、本文や欄外に朱墨や赤鉛筆による書き入れがある。濁点を加えたり、語学的に興味深い事項に印を付したり、抜き出したりしたもので、氏が入れたとみて間違いない。「此身ヲサエステレバ」（上・十八丁裏）、「少モマギレ、ル、ガ無ソ」（下・五十丁裏）のような二段活用的一段化に着目した欄外注のほか、「ハヅレヌ」「ハズシタ」（上・十二丁裏）を始めとする四つ仮名の混同、「黒カッタヤ、ロウ、アカカッタヤ、ラウ」（上・一六丁裏）といった開合の違例に注意を払うものがあり、注記を加えながら、丁寧に読み進めていたことが見て取れる。本書は、仏教学的な観点からは、安藤（二〇〇〇）で取り上げられているが、語学資料としては、前田金五郎による語彙研究での利用が目につく程度で、目立った成果はない。『春日政治著作集』に本書へ言及する論考は収録されておらず、調査の成果が表に出ることはなかったようだが、日本語史資料としての活用を目指した先駆的な試みとして、注目に値する。抄物資料を取り上げた氏の論文には、『勅規桃源鈔』『蒲室聞塵』を始めとする建仁寺両足院（京都市）の蔵書を用いた「マイルスといふ語」（『九大国文学』一、一九三二）がある。現在、国語学・国文学研究室では、政治・和男のノート類を保管しており、その中に「抄物調査」と題された手控えが残る。昭和五年（一九三〇）の訪書調査が記録されたノートで、両足院や京都大学などで実見した写本・刊本の書誌的事項や用例が書き留められている。当時は、昭和四年（一九二九）に湯沢幸吉郎『室町時代の言語研究』（大岡山書店）が刊行され、抄物が口語資料として注目され始めた時期である。二つの資料から、訓点語研究の泰斗が抄物資料に寄せた語学的な関心と調査の実態を知ることができる。

〈参考文献〉

安藤嘉則（二〇〇〇）『中世禅宗文献の研究』国書刊行会

早苗憲生（一九九六）『句双紙』の諸本と成立『庭訓往来 句双紙 新日本古典文学大系 五十二』岩波書店

柳田征司（一九九三）『抄物の世界』『説話の講座 第三巻 説話の場―唱導・注釈―』勉誠社

*本書の請求記号は、「春日文庫／三十四」で、デジタル画像が、図書館サイト (<http://hdl.handle.net/2324/4738388>) で公開されている。引用に際し、私に濁点、句読点を加えた。